JAひろしま
令和6年産

水稲栽培暦

●営農に関するお問い合わせ先
ひろしま農業協同組合 呉地域本部(営農経済部営農販売課)
呉市西中央一丁目2番25号　TEL 22-5176
呉市農業振興センター
呉市郷原野路の里二丁目3-2　TEL 77-0374

月：4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月
旬：上 中 下

ヒノヒカリ

生育相：育苗準備 → 播種期 →（育苗期）→ 移植期 →（活着期）→（有効分げつ期）→ 終有効分げつ期 →（無効分げつ期）→ 幼穂形成期 → 穂ばらみ期 → 出穂期 → 穂揃期 →（登熟期）→ 成熟期

早期落水は収量、品質の低下を招く。機械収穫に支障のない範囲で、可能な限り(収穫7～5日前まで)水管理を継続し、収量、品質の向上を図る。

水管理：植代 移植 深水 浅水 間断かんがい 根の健全化 無効分げつの抑制 中干し（茎数20本確保） 間断かんがい 浅水 最も水が必要な時期 間断かんがい

米の収量、品質に大きく影響するため、水管理を徹底する。

（出穂後30日）落水 走り水（乾燥時）　（出穂後45日）刈取 乾燥

落水後も、田の表面が極端に乾燥する場合は、随時走り水を行う。

施肥設計（全面施肥）〔10a当り〕

- 肥料：従来型 / 省力型
- 基肥：い～ね403「改」30kg / 中生い～ね755 50～55kg
- （移植後14日まで）追肥：い～ね403「改」10kg
- （出穂45～35日前）追肥：けい酸加里プレミア34 20～40kg 登熟向上 倒伏軽減 高温障害対策
- （出穂24日前）穂肥：い～ね707「改」15kg

穂肥の施用基準（ヒノヒカリ）
- ●穂肥施用時の葉色の目安 出穂約24日前・葉色値4.0～4.5
- ●葉色が濃い場合は、穂肥を延期、または減肥する。
- ●出穂10日前で葉色がうすい場合は、穂肥を5～10kg追加する。それ以降の穂肥はしない。(食味低下)

（刈取後）稲わら腐熟促進資材 アグリ革命（細粒）2kg（液剤）100ml または 石灰窒素20kg

（刈取後）土づくり肥料 ミネラルG 200kg または カキテツ120kg

あきさかり

生育相：育苗準備 → 播種期 →（育苗期）→ 移植期 →（活着期）→（有効分げつ期）→ 終有効分げつ期 →（無効分げつ期）→ 幼穂形成期 → 穂ばらみ期 → 出穂期 → 穂揃期 →（登熟期）→ 成熟期

早期落水は収量、品質の低下を招く。機械収穫に支障のない範囲で、可能な限り(収穫7～5日前まで)水管理を継続し、収量、品質の向上を図る。

水管理：植代 移植 深水 浅水 間断かんがい 根の健全化 無効分げつの抑制 中干し（茎数20本確保） 間断かんがい 浅水 最も水が必要な時期 間断かんがい

米の収量、品質に大きく影響するため、水管理を徹底する。

（出穂後30日）落水 走り水（乾燥時）　（出穂後40日）刈取 乾燥

落水後も、田の表面が極端に乾燥する場合は、随時走り水を行う。

刈取適期・乾燥
- ●刈取適期(青味籾率)
  - コンバイン刈り：5%
  - バインダー刈り：10%
  - 早刈りすると未熟粒が多くなり、刈り遅れると、胴割粒が発生しやすく、玄米の光沢が失われて品質が低下する。
- ●乾燥
  - 玄米水分：14.5～15.0%
  - ヤケ米の発生を防ぐため、刈取後はすみやかに(4時間以内)通風乾燥を行う。生籾を高速度で乾燥すると胴割れしやすいので、毎時乾燥率は0.8%以下とする。水分が高い場合は、40℃以下の温度で乾燥を開始する。水分が18～20%まで低下したら、一旦乾燥を停止して半日程度貯留し、水分ムラを解消してから適正水分まで再乾燥する。

施肥設計（全面施肥）〔10a当り〕

- 肥料：従来型 / 省力型
- 基肥：い～ね403「改」35kg / JBあきさかり502 35～40kg
- （移植後14日まで）追肥：い～ね403「改」15kg
- （出穂45～35日前）追肥：けい酸加里プレミア34 20～40kg 登熟向上 倒伏軽減 高温障害対策
- （出穂24日前）穂肥：い～ね707「改」10～15kg

穂肥の施用基準（あきさかり）
- ●穂肥施用時の葉色の目安 出穂約24日前・葉色値4.0以下
- ●葉色が濃い場合は、穂肥を延期、または減肥する。
- ●出穂10日前で葉色がうすい場合は、穂肥を5kg追加する。それ以降の穂肥はしない。(食味低下)

（刈取後）稲わら腐熟促進資材 アグリ革命（細粒）2kg（液剤）100ml または 石灰窒素20kg

（刈取後）土づくり肥料 ミネラルG 200kg または カキテツ120kg

コシヒカリ

生育相：育苗準備 → 播種期 →（育苗期）→ 移植期 →（活着期）→（有効分げつ期）→ 終有効分げつ期 →（無効分げつ期）→ 幼穂形成期 → 穂ばらみ期 → 出穂期 → 穂揃期 →（登熟期）→ 成熟期

早期落水は収量、品質の低下を招く。機械収穫に支障のない範囲で、可能な限り(収穫7～5日前まで)水管理を継続し、収量、品質の向上を図る。

水管理：植代 移植 深水 浅水 間断かんがい 根の健全化 無効分げつの抑制 中干し（茎数20本確保） 間断かんがい 浅水 最も水が必要な時期 間断かんがい

米の収量、品質に大きく影響するため、水管理を徹底する。

（出穂後30日）落水 走り水（乾燥時）　（出穂後40日）刈取 乾燥

落水後も、田の表面が極端に乾燥する場合は、随時走り水を行う。

土づくりのポイント
- ●堆肥投入による地力の増進
  - 良質な完熟堆肥を積極的に投入し、地力の増進を図る。(目標10a当り1～2t)
- ●土づくり肥料による生育の健全化
  - ミネラルGやミネミックス等の土づくり肥料を施用し、稲の健全な生育に重要な役割を果たす「けい酸」や「鉄分」等の微量要素を補給する。
  - けい酸…葉葉を丈夫にし、根の活性を高める。
  - 鉄　分…土壌中のガス害や酸欠障害から根を守る。
- ●稲わらの腐熟の徹底
  - 稲わらが翌春に残らないよう、遅くとも年内までに腐熟促進資材を施用し、土づくり肥料と一緒にすき込む。

施肥設計（全面施肥）〔10a当り〕

- 倒伏しやすいので施肥過剰に注意する
- 肥料：従来型 / 省力型
- 基肥：コシヒカリ用884 30kg / 早生い～ね755 30～35kg
- （出穂45～35日前）追肥：けい酸加里プレミア34 20～40kg 登熟向上 倒伏軽減 高温障害対策
- （出穂18日前）穂肥：NK54 10～15kg

穂肥の施用基準（コシヒカリ）
- ●穂肥施用時の葉色の目安 出穂約18日前・葉色値3.5～4.0
- ●葉色が濃い場合は、穂肥を延期、または減肥する。
- ●出穂10日前で葉色がうすい場合は、穂肥を5～10kg追加する。それ以降の穂肥はしない。(食味低下)

（刈取後）稲わら腐熟促進資材 アグリ革命（細粒）2kg（液剤）100ml または 石灰窒素20kg

（刈取後）土づくり肥料 ミネラルG 200kg または カキテツ120kg

病害虫防除

※基幹防除を徹底し、病害虫が多発する場合は、速やかに補完防除を行いましょう。

基幹防除

- 種子消毒：いもち病、ばか苗病苗 立枯病、ごま葉枯病 もみ枯細菌病、苗立枯細菌病 / テクリードCフロアブル 200倍、24時間浸漬 / 浸種前
- 床土消毒：苗立枯病 / リゾープス菌 フザリウム菌 トリコデルマ菌 / ビシウム菌 フザリウム菌 / ダコレート水和剤 / タチガレエースM液剤 / 500倍 / 1,000倍 / 混合液500ml/箱（かん注）/ 播種時
- 田植前箱処理：いもち病 イネミズゾウムシ、ウンカ類 コブノメイガ、ツマグロヨコバイ イネツトムシ、イネドロオイムシ ニカメイチュウ、フタオビコヤガ / 防人箱粒剤 / 50g/箱 / 播種時（覆土前）～移植当日
- 粒剤防除
- 液剤防除
- 粉剤防除

害虫防除重点→出穂10～5日前
紋枯病・稲こうじ病予防重点→出穂2週間前

ヒノヒカリ：7月下旬 / コシヒカリ：7月中旬 / あきさかり：7月中旬

出穂前防除
- いもち病、紋枯病 稲こうじ病 ウンカ類、ツマグロヨコバイ / ゴウケツモンスター粒剤 / 3kg/10a / 収穫45日前まで
- 穂ばらみ期：いもち病、紋枯病 ウンカ類、カメムシ類 / アミスタートレボンSE / 1,000倍、60～150L/10a / 収穫14日前まで
- 穂ばらみ期：いもち病、紋枯病 ウンカ類、コブノメイガ（※）カメムシ類 / ビームバシボン粉剤DL / 3～4kg（※4kg）/10a / 収穫14日前まで

出穂期

出穂後防除（出穂後5～7日）
- カメムシ類、ウンカ類 / スタークル粒剤 または スタークル豆つぶ / 3kg/10a / 250～500g/10a / 収穫7日前まで
- 穂揃期：いもち病 カメムシ類、ウンカ類 / ビームエイトスタークルゾル / 1,000倍、60～150L/10a / 収穫7日前まで
- 穂揃期：いもち病、カメムシ類 ウンカ類、イナゴ類 / ビームスタークル粉剤5DL / 3～4kg/10a / 収穫7日前まで

※栽培暦に記載している農薬の内容は、令和1年12月末現在の登録情報をもとに作成しています。

主要病害虫の防除

- ●いもち病
  - 主な感染源は種籾であるため、必ず種子消毒をする。発病すると蔓延するのが速いため、箱剤、粒剤による体系防除を徹底し、初発を確認したら直ちに粉剤防除を行う。特に出穂期前後の防除を徹底する。
- ●紋枯病
  - 激しく発病すると、品質低下や減収、倒伏の原因となるため、毎年よく発病する圃場では、密植、多肥をさけて栽培する。7月以降の高温時に発病しやすいので本田防除を徹底し、確認したら随時追加防除を行う。
- ●カメムシ類
  - 穂を吸汁し、加害した痕が斑点として残るため、等級下げの大きな原因となる。出穂期前後の防除を徹底し、多発状況が続く場合は、再度防除を行う。また、周辺の雑草は、カメムシ類のすみかとなるため、草刈も徹底すること。
- ●ウンカ類
  - セジロウンカ(夏ウンカ)
    - 防除時期:7月下旬～8月中旬
    - 防除水準:1株当り10匹以上
  - トビイロウンカ(秋ウンカ)
    - 防除時期:8月中旬以降
    - 防除水準:1株当り5匹以上
    - 9月以降は急激に密度上昇するため、「坪枯れ」を引き起こす。
  - ※ウンカ類は、株元に寄生する。

補完防除

- 育苗箱消毒：イチバン 500～1,000倍 瞬時浸漬又は散布
- いもち病：防除時期：発生初期 ～ 穂ばらみ期 / ブラシン粉剤DL / ブラシンフロアブル / 3～4kg/10a / 1,000倍、60～150L/10a / 収穫7日前まで
- 稲こうじ病、紋枯病：防除時期：出穂3～2週間前 / モンガリット粒剤 / 3～4kg/10a / 収穫45日前まで
- 紋枯病：防除時期：発生初期 / バリダシン粉剤DL / バリダシン液剤5 / 3～4kg/10a / 1,000倍、60～150L/10a / 収穫14日前まで
- カメムシ類、ウンカ類、イナゴ類など：防除時期：多発時 / トレボン粉剤DL / トレボン乳剤 / 3～4kg/10a / 1,000倍、60～150L/10a / 収穫14日前まで

除草剤

■ 初期剤（植代後～移植前7日まで、または移植直後に使用してください。）

薬剤名	10a当り使用量	使用時期
サキドリEW	500ml	植代時～移植前7日まで、または移植直後～ノビエ1葉期まで
草笛ジャンボ	10個(500g)	植代後～移植前7日まで、または移植直後～ノビエ1葉期まで

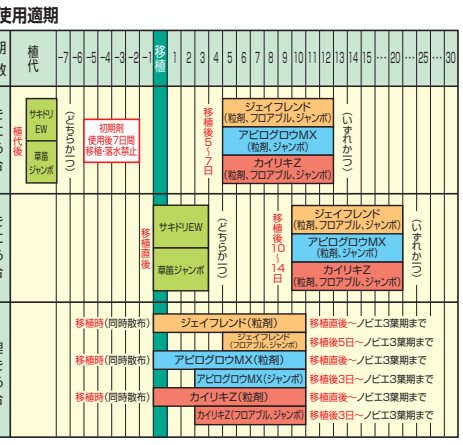
※上記の薬剤の中から、どちらか一つを選択してください。

■ 一発処理剤（初期剤との体系処理、または移植後に散布する一発処理剤として使用してください。）

適用	薬剤名	10a当り使用量	使用時期	特徴
一般田に使用する場合	ジェイフレンド	(1キロ粒剤)1kg	移植時(移植同時散布機施用) 移植直後～ノビエ3葉期まで(但し、移植後30日まで)	しつこいノビエはもちろん、ホタルイ、コナギ、SU抵抗性雑草等にもしっかりとした効果を発揮する。後発のノビエの発生を長く抑制し、イボクサ、クサネム等の特殊雑草にも優れた効果を示す。
		(フロアブル)500ml	移植後5日～ノビエ3葉期まで(但し、移植後30日まで)	
		(ジャンボ)10個(400g)	移植後3日～ノビエ3葉期まで(但し、移植後30日まで)	
水管理が難しい田に使用する場合	アピログロウMX	(1キロ粒剤)1kg	移植時(移植同時散布機施用) 移植直後～ノビエ3葉期まで(但し、移植後30日まで)	一年生雑草から多年生雑草まで幅広く抑え、水管理が難しい田にも安定した効果を発揮する除草剤。
		(ジャンボ)10個(400g)	移植後3日～ノビエ3葉期まで(但し、移植後30日まで)	
雑草多発田に使用する場合(難防除雑草対策)	カイリキZ	(1キロ粒剤)1kg	移植時(移植同時散布機施用) 移植直後～ノビエ3葉期まで(但し、移植後30日まで)	ノビエ等の一年生雑草から多年生雑草まで幅広いスペクトラムを有する。オモダカやクログワイ等の難防除雑草やイボクサ、クサネム等の特殊雑草にも効果を示す。
		(フロアブル)500ml	移植後3日～ノビエ3葉期まで(但し、移植後30日まで)	
		(ジャンボ)10個(300g)	移植後3日～ノビエ3葉期まで(但し、移植後30日まで)	

※上記の薬剤の中から、いずれか一つを選択してください。

■ 除草剤の使用適期



■ 中後期剤（雑草が残った場合に使用してください。）

適用雑草名	薬剤名	10a当り使用量	使用時期	使用方法
ノビエ 広葉雑草(全雑草)	レブラス1キロ粒剤	1kg	移植後14日～ノビエ4葉期(但し、収穫60日前まで) コナギ6葉期、ホタルイ花茎20cm、クリカワ4葉期、オモダカ矢尻葉3葉期、クログワイ草丈30cmまで	湛水散布
	ウィードコア ジャンボSD	ジャンボSD 10個(200g)	移植後7日～ノビエ4葉期(但し、収穫60日前まで) ホタルイ4葉期、クログワイ草丈20cm、オモダカ草丈30cmまで キシュウスズメノヒエ再生茎2葉期まで	湛水散布
ノビエ	トドメ1キロ粒剤	1kg	移植後14日～ノビエ5葉期(但し、収穫50日前まで)	湛水散布
広葉雑草(ノビエ以外)	バサグラン粒剤	3～4kg	移植後15～50日(但し、収穫60日前まで)	落水散布
藻類(表層剥離)	モゲトン粒剤	2～3kg	発生始～発生盛期(但し、収穫45日前まで)	湛水散布

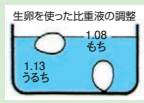
■ 除草剤の上手な使い方
1. 湛水時に田面が露出しないよう、整地、植代を均平に行ってください。
2. 除草剤散布時は、十分な湛水を確保しましょう。(粒剤・フロアブル剤は3～5cm、ジャンボ剤は5～6cm)
3. 水口、水尻、畦畔などを確認し、水の出入りをしっかり止めましょう。
4. 除草剤散布後3～4日間は通常の湛水状態を保ち、田面の一部が露出する状態になったら、通常の水深(3～5cm)になるまで、しずかに入水してください。
5. 除草剤散布後7日間は、落水、かけ流しはしないでください。

農薬の使用上の注意 ●必ずラベルを確認し、希釈倍数(濃度)、使用量、使用時期、使用回数等を守って使用しましょう。●風の有無や散布する位置、方向等をよく確認し、他の作物へ農薬が飛散しないよう十分注意しましょう。

播種・育苗

移植の30～25日前を目標に開始する。

① 塩水選
塩水選により不良な種籾(浮いた種籾)を取り除く。
※水18ℓに対する食塩の目安 うるち～4.1kg　もち～2.2kg



② 水洗い
種籾の表面についた塩分を水でしっかり洗い流す。

③ 種子消毒
テクリードCフロアブル(200倍液)で種子消毒をする。水量は種籾の2倍量とし、消毒後は水洗いしない。

24時間浸漬

水温10℃以上(15～20℃が適温)

植付面積に対する種籾・水・農薬の量

植付面積の目安	10a(約1反)	25a(約2.5反)	50a(約5反)
種籾(※)	4kg	10kg	20kg
水	8ℓ	20ℓ	40ℓ
テクリードCフロアブル(200倍)	40ml	100ml	200ml

(※)植付箱数:10a当り 18～20箱　播種量:1箱当り 160～180g(催芽籾)

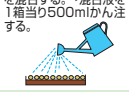
④ 風　乾
1日程度陰干しし、種籾の表面が白くなるまで乾かして、薬剤をしっかり付着させる。

⑤ 浸　種
- ●水温10～15℃、必ず停滞水で行い、水量は種籾の2倍量以上とする。
- ●最初の3日間は水交換しない。
- ●水の交換は静に行う。
- ●浸種時間は積算温度100℃を目安とする。(水温15℃で7日間、水温10℃で10日間)

⑥ 催　芽
30℃の温度でハト胸状態に催芽する。
(種籾から1mm程度の芽が出始めた状態)

⑦ 播　種
グリーンソイル、苗ソイル等の水稲用育苗培土を使用し、次のとおり播種する。
①床土を1.5～2.0cmの深さに均一に詰める。
②水がしみ通るまで十分かん水する。
③1箱当り、催芽籾160～180gを播種する。
④床土を消毒し、苗立枯病やカビを予防する。
⑤種籾がかくれる程度(0.5cm)覆土する。

床土消毒液の作り方と処理方法
水10ℓ(20箱分)にダコレート水和剤20g、タチガレエースM液剤10mlを混合する。→混合液を1箱当り500mlかん注する。



⑧ 育苗管理　生育目標:稚苗(草丈12～15cm、葉数2.2～2.5葉)

	所要日数	生育適温	注意事項
出芽	加温2～3日 / 無加温4～5日	28～30℃	●育苗器の温度管理を確実にする。●積み重ね方式の場合は10～15段とし、上下を積みかえることで出芽を揃える。●出芽中は被覆資材で保温する。(光不要)
緑化	3～4日	昼20～25℃ 夜15～18℃	●1cm程度出芽したら苗床に育苗箱を広げ、覆土が落ち着く程度にかん水する。●緑化始めは直射日光を避けるため、育苗シートで被覆し、遮光すること。
硬化	10～15日	昼15～22℃ 夜10～15℃	●育苗シートのすそを開けて換気しながら、徐々に外気温に慣らしていく。●日々の温度変化に注意し、管理すること。●培土を白乾させないよう適宜かん水する。

■土づくり肥料

肥料名	10a当り施用量	肥料成分(%) けい酸	鉄分	石灰	苦土	マンガン	特徴・効果
ミネラルG	200kg	18～20	13～18	35～38	3～4	3.5～5.0	けい酸、鉄分、微量要素をバランスよく含み、地力増進に効果的。
カキテツ	90～120kg	7～10	7～10	43	1.0～1.5	1.0～1.5	カキ殻、鉄、ケイ酸を配合した土づくり肥料。海水由来のカルシウム、く溶性苦土、ホウ素など微量要素を幅広く含んでいる。
土楽園	50～70kg	17	15	—	2	—	けい酸、鉄分を含み、少ない施用量で効果を発揮する省力型の土づくり肥料。
ケイカル	200kg	28	—	アルカリ分 45	4	—	けい酸主体。稲体を強くし病害虫の被害を軽減するほか、収量、品質の向上に効果的。
粒状ようりん	20～40kg	20	4	30	12	リン酸 20	秋施用は、稲わらの腐熟を促進する。根や茎を強くし、品質向上、倒伏軽減に効果がある。

※地力向上対策

肥料名	10a当り施用量	施用時期	特徴・効果
アヅミン	30～40kg	基肥施用時	腐植酸を約50%含み、10a当り30～40kg施用で堆肥約1t分の腐植酸を補給できる。地力の向上により、肥料効果や根の活力が高まる。

■稲わら腐熟促進資材

資材名	10a当り施用量	施用方法	特徴・効果
アグリ革命(細粒)	2kg	降雨後や朝露など土に水分がある時に均一に散布し、すき込む。	原料は稲わらを分解する酵素そのもので、土壌環境に影響を受けず、確実に稲わらを腐らせる。浮きわらや有害ガスによる根腐れ、赤枯症の発生が多い圃場に効果的。
アグリ革命アクア(液剤)	100ml	10～500ℓの水に希釈し、噴霧機で均一に散布した後、すき込む。	
石灰窒素	20kg	刈取後、できるだけ早く施用し、稲わらといっしょにすき込む。	稲わらの腐熟を促進し、有害ガスの発生を軽減する。上づくり肥料との同時施用が効果的。
豊土サングリーン(基肥用)	5kg	施用後、すぐにすき込む。窒素肥料との混合施用が効果的。	稲わらの腐熟を促進する微生物資材。紫外線に弱いので取扱に注意する。

■肥料

肥料名	対象品種	10a当り施用量 基肥	追肥	穂肥	肥料成分(%) 窒素	リン酸	加里
い～ね403「改」(基・追肥)	ヒノヒカリ	30kg	10kg	—	14	10	13
	あきさかり	35kg	15kg	—			
い～ね707「改」(穂肥)	ヒノヒカリ あきさかり	—	—	10～15kg	17	—	17
中生い～ね755(中生用～発肥料)	ヒノヒカリ	50～55kg	—	—	17	15	15
JBあきさかり502(早生用～発肥料)	あきさかり	35～40kg	—	—	25	10	12
コシヒカリ用884(基・追肥)	コシヒカリ	30kg	—	—	8	18	14
NK54(穂肥)	コシヒカリ	—	—	10～15kg	15	—	14
早生い～ね755(早生用～発肥料)	コシヒカリ	30～35kg	—	—	17	17	15

※登熟向上・倒伏軽減・高温障害対策

肥料名	10a当り施用量	施用時期	特徴・効果
けい酸加里プレミア34	基肥施用の場合 40～60kg	耕起前	けい酸と加里の相乗効果で、根張りが良く丈夫な株に育つため、登熟向上、倒伏軽減、高温障害対策として高い効果を発揮する。追肥施用が効果的。
	追肥施用の場合 20～40kg	出穂 45～35日前	

■有害ガス分解資材

資材名	10a当り施用量	施用時期	特徴・効果
豊土サングリーン(追肥用)	5kg	ガス症状(根腐れ、赤枯症)を確認したら、直ちに施用する。(湛水散布)	土壌中にたまった有害ガスを分解する微生物資材。

■倒伏軽減剤

薬剤名	10a当り薬量	10a当り希釈水量	使用時期	特徴・効果
ビビフルフロアブル	75～100ml	50～150L	出穂10～2日前	基葉に散布することにより、上位節間の伸長を抑制し、倒伏軽減効果を示す。
ビビフル粉剤DL	3～4kg	—	出穂10～5日前	

農薬名	10a当り使用量	使用時期	特徴・効果
ロミカ粒剤	2～3kg	草丈を測定し、倒伏が予想される場合は、出穂25～10日前に使用する。	上位節間の伸長を抑制し、稈長を短縮することで、倒伏を軽減する。

コシヒカリ倒伏予想	出穂前日数	30日前	20日前	15日前	稈長	倒伏危険性
	草丈	50cm以下	63cm以下	70cm以下	82cm以下	ほぼ安全
		54～60cm	68～73cm	75～80cm	80～88cm	危険性あり
		64cm以上	78cm以上	85cm以上	88cm以上	危険性大